

小学校家庭科教育の一検討

民家野外博物館の体験学習からの考察

A Study of Elementary School Home Economics Education from the Perspective of Experience-based Learning at an Outdoor Folk House Museum

千森 督子 東口 依未 平林 由理

Tokuko Chimori Emi Higashiguchi Yuri Hirabayashi

要 約

本稿では、民家野外博物館でも和歌山県立紀伊風土記の丘で実施された、小学校の体験学習を対象に、民家や昔の暮らしへの児童の関心や評価、学習成果を明らかにする。その結果、歴史を経た、地域特有の古い民家に児童は暗く、不便で暮らしにくい印象をもったが、建物の各部位には興味を示していた。また、竈の火吹き体験を通して昔の炊事の大変さを実感することができ、民家を通じた学習を全員が理解しやすいとしていた。生活空間や炊事をはじめとした暮らし、その変遷は社会科のみならず家庭科にも関連した内容であり、小学校の家庭科にも継承しながら住空間の概念や体験学習を取り入れることが望まれる。

はじめに

住まいの歴史や地方性に関しては、中学校では技術・家庭の家庭分野で学習する⁽¹⁾。しかし、小学校の家庭科⁽²⁾では取り上げられておらず、3・4 学年の社会科で、「昔から残る建物」や「昔の住まいや暮らし」等を学ぶ⁽³⁾。社会科の教科書には、昔の暮らし体験をするために郷土館を訪れ、道具や暮らしに触れたり、調べたりして理解を深めるように記述されている⁽⁴⁾。

和歌山県には郷土館的な施設の一つとして、「紀伊風土記の丘⁽⁵⁾」がある。遺跡博物館地区に保全、公開されている国の特別史跡である「岩瀬千塚古墳群」が主であるが、敷地内の野外博物館地区には和歌山県下の近世の民家4軒(国の重

要文化財である旧柳川家住宅主屋・前蔵と旧谷山家住宅、県指定文化財である旧谷村まつ氏住宅と旧小早川梅吉氏住宅)が移築され、保存・活用されている。これらの施設は貴重な文化財でありながら、「民家ガイドツアー」や「昔話と笙の音色」、夏休み企画の「民家に泊まろう」、「薪割体験」等様々なイベントや体験学習に活用されている。また、学校単位で受入れ、「昔のくらし体験・昔のあそび体験」が展開されている⁽⁶⁾。

本稿では、農家住宅である谷村家住宅で実施された小学校の体験学習成果を明らかにし、家庭科教育でも取りあげられている、「昔の住まいや暮らし」、「地域特有の住まいの在り方」との関連性や、小学校家庭科教育への継承について検討することを目的とする。

方法

本稿では、紀伊風土記の丘の谷村家住宅で行われた小学生の民家見学や昔の暮らし体験の様子を観察しながら写真撮影を行い、その後、児童に質問紙法によるアンケート調査を実施したものから結果を分析、考察する手法をとる。

被験者は、和歌山県有田郡湯浅町の田村小学校3年生 11名と4年生8名の計19名である⁽⁷⁾。調査年月日は、2016年11月16日である。

結果及び考察

1. 紀伊風土記の丘の谷村家住宅概要

谷村家住宅は和歌山県有田郡清水町に18世紀中期頃に建てられた農家住宅で、現地から紀伊風土記の丘に移築復元され、現在に至る。

屋根は茅草の入母屋形式で、壁面は土壁である。

間口914cm、奥行き759cmの規模で、平入形式である。平面構成は通り土間形式で、前土間には芋穴があり、穀物を突く唐臼が置かれている。その奥には竈が据えられ、炊事場に



写真1 谷村家住宅外観



写真2 谷村家住宅土間からみた床上部

なっている。床上の間取り形式は当地方の民家の祖型とされている、食い違い三間取り形式で、居室は「おもて」、「だいどころ」、「なんど」の3室から成り、縁側は設けられていない。「だいどころ」は板間であり、家族が食事や団欒をしながら過ごす場である。張り出し部分には囲炉裏が据えられている(写真1~4)、(図1)。



写真3 谷村家住宅座敷



写真4 谷村家住宅土間の竈

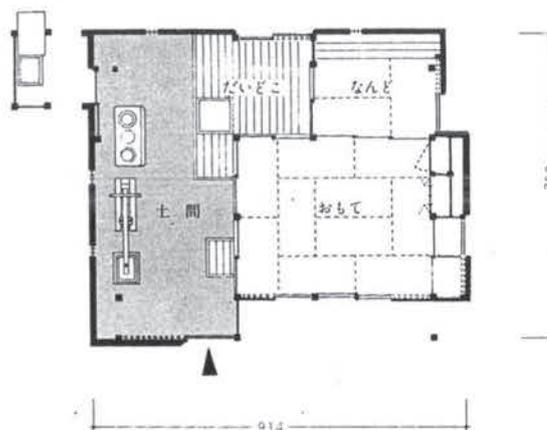


図1 谷村家住宅平面図

(『日本の民家3 農家Ⅲ』⁽⁸⁾より転掲)

2. 民家に関する児童の評価

谷村家住宅に関する児童の評価でも家庭科に関係すると思われる項目を取り上げ、検討する。

① 明るさ

建物内部の明るさに関しては、19名⁽⁹⁾中12名が「暗い」としている。学年別にみると偏りがあり、4年生は全員が「暗い」と感じている。一方、「明るい」とするのは3名しかいないが、すべてが3年生である(表1)、(図2)⁽¹⁰⁾。

見学、体験は日中に行われたが照明器具のない内部は、現代の子どもにとっては暗く感じる事が明らかになった。

表1 内部の明るさ

	明るい	暗い	どちらとも	合計
3年	3	4	4	11
4年	0	8	0	8
合計	3	12	4	19

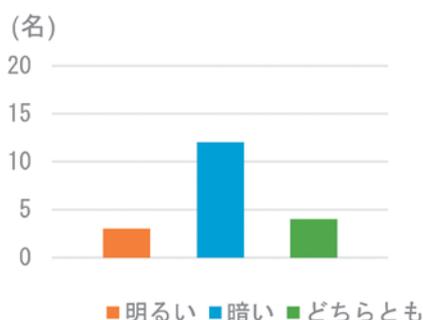


図2 内部の明るさ(3・4学年合計)

② きれいさ

民家は環境整備により適切に施設管理が行われているが、「民家内部のきれいさ」に関する児童の印象は、19名中8名が「どちらともいえない」と評価し、7名が「きれい」、4名が「きたない」としている。「きれい」、「きたない」の概念は個人差や時代性もあると考えられるが、「どちらともいえない」が半数を占めるのは、歴史を経た建物に関する評価はとりわけ難しいためと推測される(表2)、(図3)。

学年別には、3年生では「きたない」とするものは皆無であるが、4年生では半数が「きたない」としている。年齢が上がるにつれて客観性が増し、評価が厳しくなる可能性が考えられる。

表2 民家内部のきれいさ

	きれい	どちらとも	きたない	合計
3年	6	5	0	11
4年	1	3	4	8
合計	7	8	4	19

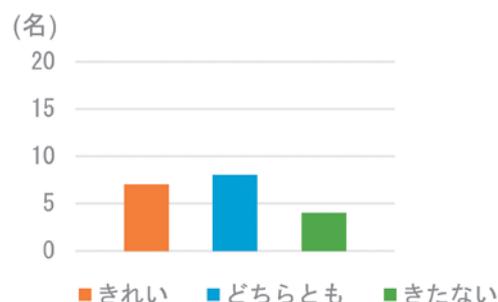


図3 民家内部のきれいさ(3・4学年合計)

③ 生活の利便性

生活の利便性に関しては、19名中半数の10名が「不便」としている。他方、「便利」とするものは3名しかなく、「どちらともいえない」(4名)より少ない(表3)、(図4)。

とりわけ4年生では、「不便」(5名)とするものが「便利」(1名)を大きく上回り、より不便さを認識している。

表3 生活の利便性

	便利	不便	どちらとも	無回答	合計
3年	2	5	2	2	11
4年	1	5	2	0	8
合計	3	10	4	2	19

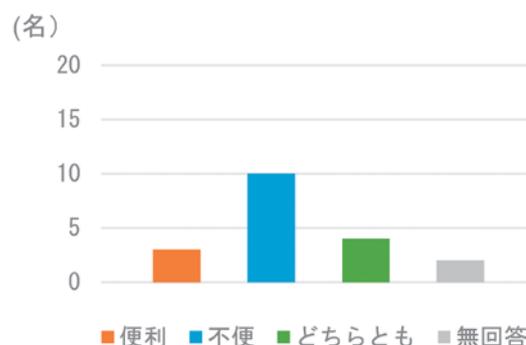


図4 生活の利便性(3・4学年合計)

④ 建物としての頑丈さ

谷村家住宅は現代では見ることが困難な茅葺の木造住宅

であるが、建物としての頑丈さに関しては、全体では「頑丈でない」の評価が19名中9名と最も多く、「頑丈」(6名)との評価の1.5倍ある(表4)、(図5)。

学年別には、3年生の方が「頑丈」とする傾向にあり、4年生は「頑丈でない」と感じている児童が多い。

表4 建物としての頑丈さ

	頑丈	頑丈でない	どちらとも	合計
3年	4	3	4	11
4年	2	6	0	8
合計	6	9	4	19

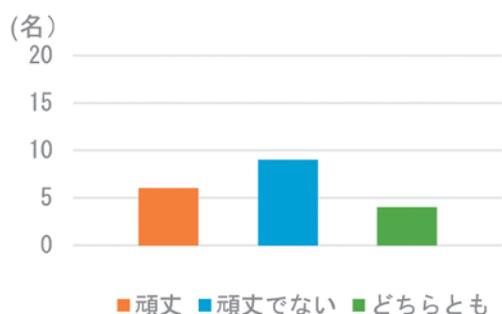


図5 建物としての頑丈さ(3・4学年合計)

⑤ 暮らしやすさ

民家での暮らしを、「暮らしにくい」と評価するのは19名中9名と半数を占め、「暮らしやすい」とするのは1名と少数である。また、「どちらともいえない」も9名いる(表5)、(図6)

「どちらともいえない」が半数みられるのは、昔の暮らしと現在の暮らしが大きく異なるので、なかなか評価が難しいためと推測される。

学年別には、4年生では、「暮らしにくい」が8名中5名あることから、「暮らしにくい」に偏っているといえる。一方、3年生は、「暮らしにくい」は11名中4名で、「どちらともいえない」が11名中6名と最も多い。そのために、3年生では判断がしにくい傾向にある。

表5 民家での暮らしやすさ

	暮らしやすい	暮らしにくい	どちらとも	合計
3年	1	4	6	11
4年	0	5	3	8
合計	1	9	9	19

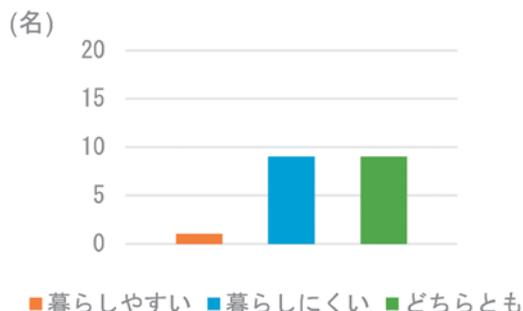


図6 民家での暮らしやすさ(3・4学年合計)

⑥ 古民家に関する感想

古民家に関する感想では、9名から回答が得られた。自由記述方式での記入であるが、まとまりがあり、「興味があり宿泊してみたい」(5名)という意見が最も多く、ついで「不便で大変」(3名)である。

紀伊風土記の丘では、「民家に泊まろう」の宿泊体験企画があるために、希望に即したさらなる体験も可能であり、学習の発展が望まれる。

3. 体験学習について

民家における暮らし体験は主に土間で行われ、床上部分に関しては土間からの見学のみであった。土間では、奥土間に据えられている竈の火吹き体験と前土間にある芋穴に入り見学をした⁽¹¹⁾。

炊事場は近世から近代、現代と時代の変遷の中で大きく移り変わっているが、旧態に復元されているので土製の竈が据えられている。一人ひとり、火吹き竹を吹いて火吹き体験を行った(写真5)。



写真5 火吹き体験

① 竈の火吹き体験による煙たさ

炊事や風呂焚きなどで薪を燃やすことは、燃料源の革新によりなくなってきている。そのために、家事作業を行う中で煙たさや、目の痛み、咳などを経験したことのない児童が大部分である。また、近年は電磁調理器による調理方法が普及し、直接火を見ることも少なくなっている。

火吹き体験では、「煙たかった」(19名中11名)、「やや煙たかった」(5名)とするのが大部分で、「煙たくなかった」(3名)とするものは少数であった(表6)、(図7)。

学年別には、3年生の方が「煙たかった」とする者が多い。

表6 竈の火吹き体験 煙たさ

	煙たかった	やや煙たかった	煙たくなかった	合計
3年	7	2	2	11
4年	4	3	1	8
合計	11	5	3	19

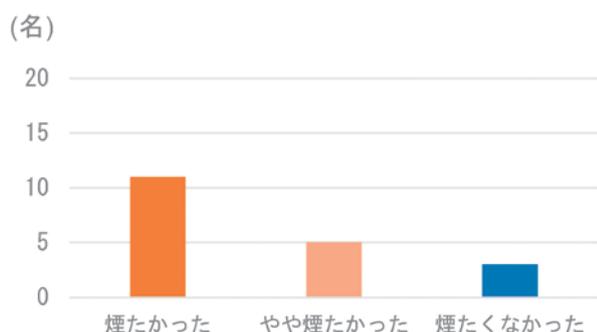


図7 竈の火吹き体験 煙たさ (3・4学年合計)

② 竈の火吹き体験による熱さ

竈の火吹き体験による熱さに関しては、19名中10名が「熱かった」としている。「やや熱かった」(8名)も入れると、18名と大部分が熱さを体験している。「熱くなかった」とするのは、3年生の1名のみであった(表7)、(図8)。

昔は炊事をするのがいかに大変であったかという認識が深まり、さらに、現代の住まいの便利さや快適性への理解につながったと考えられる。

表7 竈の火吹き体験 熱さ

	熱かった	やや熱かった	熱くなかった	合計
3年	7	3	1	11
4年	3	5	0	8
合計	10	8	1	19

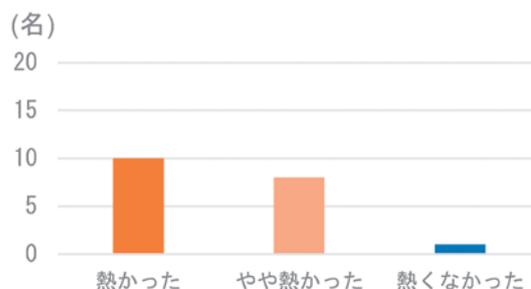


図8 竈の火吹き体験 熱さ (3・4学年合計)

4. 民家で特に興味をもった箇所

民家で特に興味をもった箇所をあげてもらったところ、3年生と4年生合わせて81の回答数があった(表8)、(図9)。

設定した項目以外で興味があったものを「その他」で自由に記述してもらったところ、「その他」が最も多く14回答あり、13が「芋穴」であった。「芋穴」の関心の高さがうかがえる。残りは、「すべてに興味があった」であるため、「芋穴」は14回答といえる。児童は、「芋穴」の空間に積極的に興味を示し、順次、中に入り、深さや広さ、土の中の感触、暗さを体感していた。地上より夏は涼しく、冬は暖かく食物の保存に適していることなどを学んでいた(写真6)。

次に多いのが同じく体験学習をした「竈」(81回答中13)であった。「草屋根」(12)、「土壁」(11)、「土間」(9)、「囲炉裏」(6)、「流し」(6)、「板の間」(6)、「畳」(4)と続く。

学年別にみると、3年生は、「竈」に興味があったとの回答が最も多いものの、その他の箇所と大差はなく、まんべんなく

表8 民家で特に興味を持った箇所 (複数回答可)

	竈	草屋根	土壁	土間	囲炉裏	流し	板の間	畳	その他	合計
3年	8	7	6	6	5	5	6	4	7	54
4年	5	5	5	3	1	1	0	0	7	27
合計	13	12	11	9	6	6	6	4	14	81

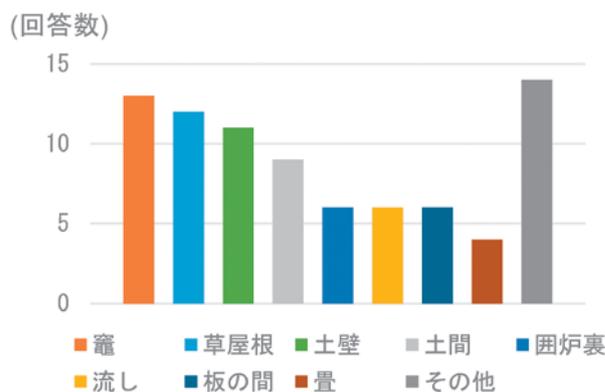


図9 民家で特に興味をもった箇所 (3・4学年合計)

興味をもっている。しかし、4年生の回答では「その他」(芋穴)や「草屋根」、「土壁」、「竈」の回答に偏りがみられ、反対に「囲炉裏」や「流し」は少なかった(表8)、(図9)。



写真6 芋穴見学

5. 紀伊風土記の丘での学習について

紀伊風土記の丘での学習については、「わかりやすかった」とするものは19名中17名あり、「ややわかりやすかった」(2名)も含めると全員が肯定していた(表9)、(図10)。

そのために、このような施設で実物の家屋や暮らしに触れ、体験学習をすることは座学より理解しやすいといえる。

表9 紀伊風土記の丘での学習について

	わかりやすかった	ややわかりやすかった	わかりにくかった	合計
3年	10	1	0	11
4年	7	1	0	8
合計	17	2	0	19

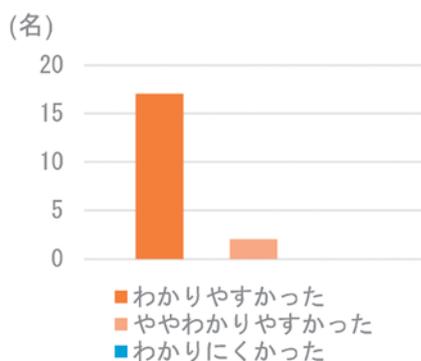


図10 紀伊風土記の丘での学習について(3・4学年合計)

まとめ

明るく、清潔で便利な住まいで生活している現代の児童には、歴史を経た古い民家は、暗く、不便で暮らしにくいといった印象をもつ。しかし、「芋穴」や「竈」、「草屋根」、「土壁」、「土間」、「囲炉裏」など現代の生活ではみられない家屋の各部位や炊事設備に興味を示していた。また、竈の火吹き体験を通して、煙たさや熱さを知り、昔の人々の炊事の大変さを実感していた。

3年生と4年生では民家の評価が分かれている項目もあり、全体的に4年生の方が3年生より厳しく受け止めている。体験学習の火吹き体験でも、「煙たくない」、「熱くない」とする者が3年生より多く、忍耐力が強くなっていると推測される。

紀伊風土記の丘での学習を全員がわかりやすいとしていることから、民家野外博物館での体験学習は児童には生活空間や暮らしの変遷を知る手立てとなり、理解しやすく、学習効果も上がることが明らかになった。

体験学習で学んだ暮らしに関係した内容は、小学校の社会科でのみ取りあげられ、家庭科では取りあげられていない。しかし、掘り下げられた内容が再び中学校家庭科で設けられている。学習体系として、小学校の社会科で学んだ暮らしに関連した内容が途切れることなく、5・6年生の家庭科につながり、中学校の家庭科に系統立てるようにしていく必要があると考えられる。

本稿では、被験者数が少なく統計処理をするには困難であったが、今後、さらに事例を増やし、別の角度からも検証していきたい。

註および文献

- (1) 大竹美登利他: 文部科学省検定済教科書 中学校技術・家庭科用 家庭分野、p.149、pp.164-165、開隆堂出版株式会社、2016
- (2) 小学校学習指導要領解説 家庭編、文部科学省、2008
- (3) 池野範男他: 小学社会 3・4 年上、日本文教出版株式会社、p.38、pp.110-125、2016
- (4) 前掲(3)、pp.116-125
- (5) 「和歌山県立紀伊風土記の丘」は、1971年に和歌山市岩瀬に国の特別史跡である「岩橋千塚古墳群」の保全・研究・公開を主目的として開館された、考古・民俗学系

の登録博物館施設である。

- (6) 同博物館ホームページ、<http://www.kiifudoki.wakayama-c.ed.jp/>
- (7) 平成28年度には小学校は101校来館している。その中で「昔の暮らし体験」を実施したのは8校である。本稿は調査の了解が得られた、湯浅町立田村小学校の体験学習を対象とした。
- (8) 工藤圭章編『日本の民家3 農家Ⅲ』、p.196、株式会社 学習研究社、1981
- (9) 3年生11名、4年生8名、計19名と被験者数が少数のために、文中では割合表示ではなく、実数で示す。
- (10) 表は学年別と両学年の合計の回答数を示し、図は両学年の合計数を示したものである。
- (11) 芋穴見学は、「4. 民家で特に興味をもった箇所」で取り上げる。

謝辞

調査にご協力を賜りました湯浅町立田村小学校の教員および児童の皆様には深く感謝の意を表します。

